東京ジャーミイ金曜日のホタバ

2006年3月17日

信仰が人間に与えるもの

親愛なるムスリムの皆様。信仰は、教えの否定とどう違うのでしょうか。信仰することによる益とはなんでしょうか。信仰が人間にどのような価値を与えるのでしょうか。今日は、この点をテーマにしたいと思います。

信仰とは、前もって得る知識であり、否定とは先入観です。信仰するためには知ることがまず前提条件となります。人は知らないものを信じることはできないのです。しかし否定には、何の前提条件も必要ありません。無知であることで十分なのです。

信仰は、愛情に似ており、否定は憎悪に似ています。愛情とは肯定的なもので、憎悪は否定的なものです。愛情は人間に多くのものを獲得させせますが、憎悪は人間に何も与えません。同様に、信仰はその真髄から、肯定的なものであり、憎悪とは否定的なものです。

信仰はプラスすること、否定はマイナスです。信仰は多くのものを獲得させせますが、否定は何も獲得させません。

信仰は思い出すことであり、否定は忘れることです。思い出すこととは取り戻すことであり、忘れることとは失うこと、減らすことです。信仰する人は、その良心に前から存在する、創造された時から持っている「知識」を思い出したことになるのです。否定によっては、後から存在させられた、後から生じた「私」というものが忘れられるのです。

信仰は一つの結びつきであり、否定は一つの断絶です。結びつきは人を安定したものにします。だから信仰は、信用の保証のようなものです。否定は、本来のあり方からの断絶を象徴するものです。

信仰は安定であり、否定は不安定です。信仰は、その持ち主を、定着させ、安定させます。自分の居場所で安定している人は、落ち着きや安らぎを見出します。否定する人は一つの道をたどることなく、うろうろしている状態です。最初は自由を謳歌しているつもりでも、それが偽りのものであることに気づくのに、それほど時間はかからないのです。

信仰は自分の立場を知ることで、否定は自分の立場をわきまえないことです。信仰は、我を忘れずにいる状態です。我を忘れている人は、自分を見失います。自分を見失っている人は、自分の立場をわきまえることができないのです。

信仰は感謝することであり、否定は恩知らずであることです。感謝とは、パンではなく、そのパンを与えた存在に、対象となる権利があります。主のない恵みは存在しません。何かが恵みであるなら、必ず、それを与えた存在があります。恵みに気づく者は、恵みの主を探します。恵みの主を見出した者は、その存在に感謝するのです。恵みに気がつかずにいることは、恩知らずでいることです。

信仰は誠実さであり、否定は不誠実さです。アッラーに誠意を示さない者は、他者にも誠意を示しません。最大の誠意は、「最も偉大なるお方」への誠意です。

信仰は顔を向けることであり、否定とは背を向けることです。光に顔を向けるものは、目を輝かせます。光に背を向ける者は、人生が彼自身を閉じ込めます。アッラーへの信仰は、光の源に顔を向けることです。否定とは、何かに向き合うことではなく、どこかを向くことを否定する事なのです。

信仰とは関心であり、否定とは無関心さです。信仰する人は、存在することの意義と目的に関心を示しているのです。否定する人の存在の意義、目的は、関心が払われないままとなるのです。

信仰は、人に無限の境地を開き、彼を行き止まりのない完全性への旅へと導く、強い力です。否定とは、意識と、その上の存在との結びつきを絶ちます。これによって意識は意識の下で押しつぶされた状態となります。アッラーのしもべとなることから逃げ、無意識のうちに自分を操る我欲のしもべとなっていることに気づくでしょう。

信仰することにどれほどの益があるか、気づいていただけたでしょうか。